

4. 資源管理体制推進事業(アマダイ)

舛田大作・吉田政彦*

対馬周辺海域におけるアマダイ延縄および立縄漁業では、平成22年度から資源回復計画に基づき漁獲努力量の削減措置等を実施している。本事業では、長崎県資源管理指針の見直しの検討等に必要となる科学的データの収集を目的として調査を行った。

I. 漁獲実態調査

方法

長崎農林水産統計年報(九州農政局長崎農政事務所)をもとに対馬海区におけるアマダイ類の漁獲量を整理した。また、対馬標本漁協における平成28年1月～12月のアマダイ銘柄別漁獲統計を整理した。

結果

長崎農林水産統計年報によると、対馬海区におけるアマダイ類漁獲量は、平成13年から平成15年まで約200トンで推移していたが、平成16年には146トンに減少した。その後若干回復傾向が見られたが、平成19年以降再び減少傾向を示し、平成23年は119トンになり、平成27年は98トンの漁獲であった(図1)。

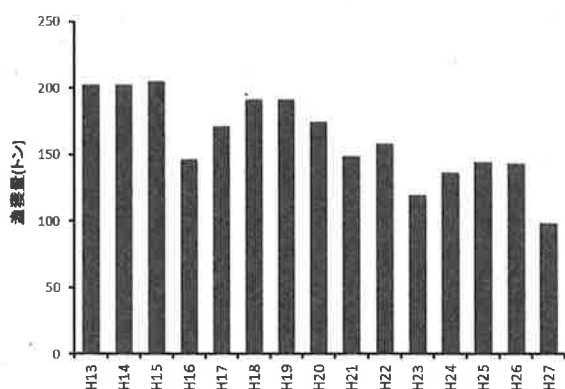


図1 対馬海区におけるアマダイ類漁獲量の経年変化(長崎農林水産統計年報)

平成28年の対馬標本漁協の月別漁獲量をみると、5月が約9トンで最も多く、その他では4、6-7月に5トンを上回る漁獲量があった。1-2月は悪天候の日が多く、漁獲量は低調に推移した。

銘柄別に見ると銘柄「特」が全体の約1割、銘柄「大」と銘柄「中」が約3割、銘柄「小」が約2割を占めており、銘柄「豆」および「豆豆」は少なかった(図2)。

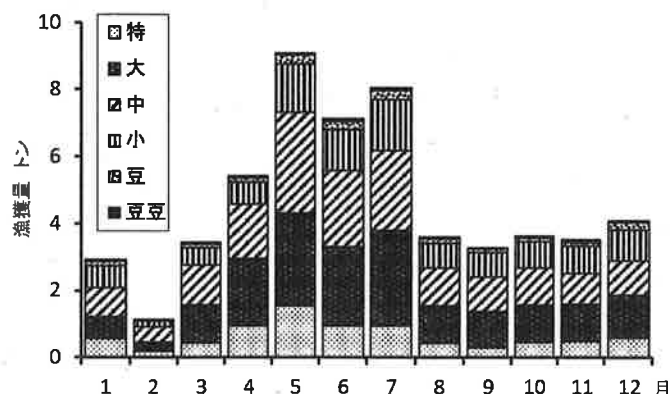


図2 標本漁協におけるアマダイの月別漁獲量

II. 資源状態の評価

方法

対馬標本漁協の平成28年3月～平成29年2月における銘柄別漁獲データと生物統計調査で得られた銘柄別全長組成から、標本漁協における漁獲物の全長組成を推定した。耳石の年齢査定結果から四季毎(春季3～5月、夏季6～8月、秋季9～11月、冬季12～2月)に作成したAge-Length-Keyを用いて、全長組成データを年齢分解した。

また、平成11年～平成28年度において年漁獲尾数と操業日数のデータを集計して、年別のCPUEを計算した。これらの年齢組成とCPUEのデータを用いて、チューニングVPA解析により、平成11年からの資源量指数の経年変化を推計した。

結果

漁獲努力量は、平成11年以降減少傾向で、平成28年の年間操業隻数は1,697であった。資源量指数は、平成23年から緩やかに増加していたが、平成27年以降は減少し、平成28年は0.79となった(図3)。

* 対馬水産業普及指導センター

まとめ

対馬海区アマダイ資源回復計画では、平成21年の資源水準を平成28年まで維持することを目標としている。

平成21年を1とする資源量指数は、平成24年以降増加して平成25から26年にかけて1以上で推移したが、平成27年以降は減少している。

(担当：舩田)

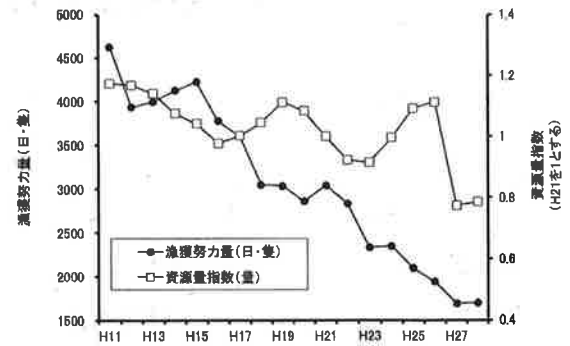


図3 対馬海区におけるアマダイ資源量指数
漁獲努力量